

# 日本漢音における反切・同音字注の

## 仮名音注・声点への反映について

— 金沢文庫本『群書治要』鎌倉中期点の場合 —

佐々木 勇

キーワード：群書治要、経書、清原教隆、反切、人為的漢音

### 要 旨

日本漢音資料中には、反切・同音字注から作り出された「人為的漢音」が存することが指摘されている。

しかし、そのような資料は、意外と少なく、経書訓点資料である高山寺蔵『論語』鎌倉期点には、「人為的漢音」が無いことがいわれていた。

本稿では、鎌倉時代中期加金の金沢文庫本『群書治要』経部を調査し、以下の点を明らかにした。

1. 日本漢音として一般的ではない「人為的漢音」が存する。
2. 声点による声調標示も、反切・同音字注を反映した部分がある。

3. 声点による濁音標示も、反切・同音字注を反映している。

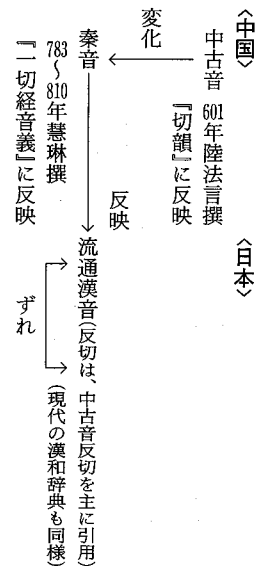
本稿の検討の結果、経書訓点資料を一律に扱えないことが知られた。今後、各文献の調査を重ね、日本漢字音における反切・同音字注の役割を考察する必要がある。

### 一 本稿の目的と対象資料

#### 1. 本稿の目的

日本漢音は、反切・同音字注の支えによって、維持され、伝承された面がある。その反切の三大出典は、基本的に中国中古音の体系を反映する、『玉篇』『切韻』『玄扈先生切韻音義』であった。<sup>注1</sup>しかし、一般的な日本漢音（以下、流通漢音という）<sup>注2</sup>は、中国唐代中期北方の現実音（秦音）を反映している。<sup>注3</sup>その結果、反切音と流通漢音とにずれが生じる。

この「ずれ」をどう処理したかが、日本漢字音史の問題となる。



「ずれ」への対処法は、次のように分類できる。

A. 流通漢音を重視する場合

ア. 反切・同音字注を流通漢音に合わせる資料

『倭名類聚抄』・『類聚名義抄』・唐招提寺藏『孔雀経音義』院政期写本が挙げられている。<sup>注4</sup>

イ. 反切・同音字注に合わない流通漢音を加点する資料

比較的早い資料として、十世紀末〜十一世紀初頭に加点された醍醐寺藏『妙法蓮華経釈文』が指摘されている。<sup>注5</sup> 左は、その例である(以下、へく内は、反切・同音字注)。

不へ方久反(上八オ5) 報へ博耗反(上二六ウ5)

「不」報に付された反切を漢音で読めば、それぞれ「ヒウ」「ハウ」となる。しかし、掲出字には、流通漢音「フ」「ホウ」が加点されている。<sup>注6</sup>

このように、中古音反切を引用しつつも流通漢音を加点する資料は、その後、継続的に見られる。<sup>注7</sup>

B. 中古音反切・同音字注を重視する場合

反切に合わせて流通漢音を改変した音は、「人為的漢音」と呼ばれている。<sup>注8</sup> この「人為的漢音」が見られる資料として、『漢書楊雄傳』九四八年点・国宝『漢書』室町期点・『史記』一〇七三年点<sup>注9</sup>が指摘されている。

また、日本漢音声調が反切の影響を受けたものとして、醍醐寺藏『妙法蓮華経釈文』・『蒙求』鎌倉後期点<sup>注10</sup>が報告されている。

以上のような状況は、不自然に思われる。中古音反切を引用する資料数の割に、それを反映した資料が少ないからである。この不自然さは、中古音反切は、いったい何のために引用されているのかという疑問を生む。そして、中古音反切を反映して流通漢音が改変された例が、右以外にも存するのではないかと思われる。<sup>注11</sup>

そこで、本稿は、そのような資料を見出すことを目的とする。日本漢字音史における反切・同音字注の役割を考えるための基礎作業である。

2. 対象資料

本稿の目的から、中古音反切とともに、仮名音注・声点がある程度加点されている資料が求められる。よって、鎌倉時代以降の漢籍訓点資料が有効であろう。また、底本の反切・同音字注すべて機械的に引用したものではなく、加点者の判断によって選択された反切・同音字注を残す資料が望ましい。その反切・同音字

注が機能していた可能性が高いからである。

このような条件を満たすものとして、金沢文庫本『群書治要』がある。

本資料は、反切・仮名・声点とも加点される鎌倉時代漢籍訓点資料の白眉である。その経部の訓点は、清原教隆一人で加点したことが奥書より知られる。そして、前代の訓点を加点者清原教隆が変更していることが明らかにされている。<sup>注12</sup>

均質な用例を得るため、本稿の対象を、この経部(巻一〜巻十、巻四欠)とする。

金沢文庫本『群書治要』経部全体の音注数(延べ数)は、次のとおりである。

反切・同音字注	仮名音注	声点	計
二七四	一九四二	三〇五五	五二七一

二 基本事項の確認

本資料の反切・同音字注の仮名音注・声点への影響について調べる前に、その出典と加点状況とを確認しておきたい。

1. 反切・同音字注の出典

日本における経書の学習には、『經典釈文』が利用された。<sup>注13</sup> 金沢文庫本『群書治要』の音注もまた、『經典釈文』に依っていると指摘がある。<sup>注14</sup>

そこで、まず、金沢文庫本『群書治要』の漢文注と『經典釈文』

の記述とを比較してみた。<sup>注15</sup>

左に、金沢文庫本『群書治要』の巻第一「周易」から、比較的長文のものを引用する(へく内は、義注を含んだ群書治要の記述)。

(一)内は、群書治要の所在行数。『經典釈文』の記述が異なる場合は、群書治要所在の次に「」内に『經典釈文』の記述を記す。

貴へ彼為反徐甫寄反李軌府益反傅氏云貴古班字文章貌鄭云變也文飾貌王肅符文反云有文飾黃白色(28)「彼偽反」

羨羨へ在干反馬云委積貌薛虞云禮之多也又音賤黃云狼積貌一云顯見貌子夏傳作殘殘(22)

坎へ徐古感反本又作陷京劉作欲儉也陷也八純卦象水(21) 洵へ在薦反徐在悶反舊又才本反爾雅云再也劉云仍也京作臻干

作荐(21) 離へ列池反麗也麗著也八純卦象日象火(27) 右の如き長文が、『經典釈文』と一致する。

また、次のように「釋文曰」として引く全文が、『經典釈文』に等しい。

或へ釋文曰或有也一云常也鄭本作咸承(25)

以下の巻でも同様である。よって、従来の指摘の通り、本資料の反切・同音字注は、『經典釈文』に原則として依拠していると見て良い。<sup>注16</sup>

2. 反切・同音字注の加点状況

金沢文庫本『群書治要』経部の訓点は、清原家伝来の訓点その

ままではないことを、音注について確認しておきたい。経部の中で、前代の清原家点本が残るのは、東洋文庫蔵『春秋経傳集解』保延五年(一一三九)類業加點本のみである。そこで、これと比較する。

金沢文庫本『群書治要』は、巻第四が欠けているため、巻第五「春秋左氏傳 中」の本文共通部分と比較する。なお、『春秋経傳集解』には、清原類業が説き、教隆が伝えた訓読を、文永五・六年に移点した別本(書陵部蔵)も現存する。これもあわせて、掲げる。三本が共通する部分の本文冒頭を、字音注のみ残して記すと、次のようになる。

A. 東洋文庫蔵『春秋経傳集解』保延五年(一一三九)類業加點本

(原本調査に依る)

〔一〕内は、割り注。右傍線は、音読符。二字をつなぐ中央の線は、音合符。上の数字は行数。以下、同じ)

43 ●二年鄭公子帰生伐宋 宋華元禦之。將戰華元。殺羊食士。其御羊斟不與。及戰曰。讎昔之

72 羊。子為政「讎昔猶前日也」今日之事我為政與入鄭師。故敗。●晋靈公不君「失君道」厚斂力斂。以彫牆「彫畫」也。從

臺上彈 徒丹反 人觀其避丸也 宰夫膳音而熊蹯扶元反 不熟殺之眞之鼓反 諸眷音本 使婦人載以過朝「眷宮九呂反」屬趙盾士季患之。將諫。士季曰。諫而不入則莫之繼也會。

C. 書陵部蔵『春秋経傳集解』文永五年(一二六八)直隆移点本

(書陵部蔵のカラー写真に依る)

56 二年鄭公子帰生伐宋 宋華元禦之。將戰。華元。殺羊食士。其御羊斟不與音預。及戰曰。讎昔之

96 羊。子為政「讎昔猶前日也」今日之事我為政與入鄭師。故敗。●晋靈公不君「失君道」厚斂力斂。以彫牆「彫畫」也。從

臺上彈 徒丹反 人觀其避丸也 宰夫膳音而熊蹯扶元反 不熟殺之眞之鼓反 諸眷音本 使婦人載以過朝「眷宮九呂反」屬趙盾士季患之。將諫。士季曰。諫而不入則莫之繼也會。

請先。不入。則子繼之。三進及溜。而後視之。士季隨會也。三進。三伏。公不省。而又前也。公知欲諫。故伴不視。曰。吾知所過矣。將改之。稽首

而對曰。人誰不過。過而能改善。莫大焉。詩曰。靡不有初。鮮克有終。夫如是。則能補過者。鮮矣。君能有終。則社稷之固也。豈唯群臣賴之。

右の範囲では、B群書治要本は、A類業加點本の反切・同音字注を、多く省略している。それに対して、C書陵部現蔵本は、A類業加點本の反切・同音字注をすべてとどめている。

Cも教隆が伝えた訓点であるから、B群書治要にも同様の加點が可能であったはずである。しかし、教隆は、それをしていない。三本の対照が可能な範囲全体(B群書治要で五五行分)で、各本

請先。不入。則子繼之。三進及溜。而後視之。士季隨會也。三進。三伏。公不省。而又前也。公知欲諫。故伴不視。曰。吾知所過矣。將改之。稽首

B. 書陵部蔵『群書治要』建長六年(一二五四)教隆加點本

(汲古書院の覆製本に依る)

4 ●二年鄭公子帰生伐宋 宋華元禦之。將戰華元。殺羊食士。其御羊斟不與。及戰曰。讎昔之

8 臺上彈 徒丹反 人觀其避丸也 宰夫膳音而熊蹯扶元反 不熟殺之眞諸眷音上 使婦人載以過朝「眷宮九呂反」屬趙盾士季患之。將諫。士季曰。諫而不入則莫之繼也會

11 請先。不入。則子繼之。三進及溜。而後視之。士季隨會也。三進。三伏。公不省。而又前也。公知欲諫。故伴不視。曰。吾知所過矣。將改之。稽首

13 而對曰。人誰無過。過而能改善。莫大焉。詩曰。靡不有初。鮮克有終。夫如是。則能補過者。鮮矣。君能有終。則社稷之固也。豈唯群臣賴之。

の音注加點数を調べてみた。結果は、次の通りである。

Table with 4 columns: 反切・同音字注, 仮名音注, 声点, 音合符, 音読符. Rows A-E showing counts for each category.

B群書治要は、反切・同音字注をほとんど記さず、音合符・音読符を多用している。C春秋経傳集解一二六八年点は、A一二三九年点の訓点をほぼ伝え、その上に仮名音注を加えている。

したがって、B群書治要における反切・同音字注は、必要性を認め、教隆が残したものと考えられる。よって、本資料の反切・同音字注は、仮名音注・声点に反映されていることが予想される。

三 金沢文庫本『群書治要』経部の反切・同音字注と仮名音注

1. 反切・同音字注と流通漢音とが一致する場合 金沢文庫本『群書治要』経部の反切・同音字注(延べ二七四例)が示す音を、日本漢音体系に对照させると、大部分が一致する。『經典釈文』の反切・同音字注と日本漢音の体系とは、重なる部分が多いためである。

一方、金沢文庫本『群書治要』に加點された仮名音注もまた、流通漢音とほとんど一致する。従来、本資料が漢音資料として活用されてきた所以である。よって、反切・同音字注から導かれる音と仮名音注とは一致す

ることが多い。  
ただし、これをもって、両者に関係があったとはいえない。両者の依って立つ体系が近似しているから、当然の結果である。

しかし、次のような例では、反切・同音字注を参照して仮名音注が加えられたと考えられる。

- 敦<sup>ツ</sup> (平) <徒端反> タル (三四五) 敦は聚<sup>ツ</sup> 貌也 (三三九割注)
- 敦厚<sup>ツ</sup> ニシテ (一四六) ・敦<sup>ツ</sup> 実 (二三九) ・敦<sup>ツ</sup> 朴 (七四七)
- 敦<sup>ツ</sup> (平) 煌 (六八二)

「敦」は、「廣韻」で桓・魂両韻に記載され、両音の意味が異なる。右の反切「徒端反」は、「集まる」意の桓韻「タン」であることを示すために引かれたものであろう。他の意味のときには、「ト」+加えられている。

次の諸例も、「廣韻」に複数音・義があり、音・意味特定のために反切が利用された可能性が高い。義注をあわせて引用するのもそのためであらう。

- 狂<sup>ツ</sup> (去) <音岸獄也又五千反> (一三三)
- 將<sup>ツ</sup> (入) <音劣脇肉也> (一四一)
- 渙<sup>ツ</sup> <呼乱反散也> (一三二) 渙<sup>ツ</sup> (一三二)
- 觀<sup>ツ</sup> (去) <音喚反示也> (一三〇)
- 解<sup>ツ</sup> (上) <音蟹緩也> (一三三)

- ⑨ 諂<sup>ツ</sup> (去) <莫遍反> 眩<sup>ツ</sup> (去) <玄通反> セザル (二二四)
- 眩<sup>ツ</sup> (平) 惑<sup>ツ</sup> セズ (八二五)
- ⑩ <古没反一没為筆反水流也> (八三六上欄)
- 汨<sup>ツ</sup> (入) 然と (シ) て (八三六)
- ③ 「荐」は、「廣韻」にソンのあたる音が無い。流通漢音はセンで、本資料にもセンの加えられた例が存する。『經典釈文』反切「手遜反」によって、「ソ」+と記されたと考えられる。
- ④ 「御」の「カ」も、当該箇所上欄「牙嫁反」に依ると思われる。「廣韻」は、魚韻のみである。
- ⑤ 「移」は、「廣韻」では、平声「七逾切」「直離切」の音のみである。長承本「蒙求」でも、「スウ」と加えられている。
- ⑥ 「数」の「ソク」も、「音速」から導かれたものようである。「廣韻」入声では覚韻であり、本資料においても他二例の加えられた「サク」である。

⑦は、「廣韻」灰韻であり、他の日本漢音資料では「タイ」とされる字である。

⑧「諂」の「シウ」も、「廣韻」に記載が無い。流通漢音では、本資料巻十の「テン」が一般的な形である。

⑨「眩」は、「廣韻」には、合音しかない。流通漢音でも「クエン」とするのが当時一般的であり、本資料にもその例がある。「ケン」は、「玄通反」から出た音であらう。

⑩「汨」は、于母質韻の字で、流通漢音では「イツ」となる。

2. 反切・同音字注と流通漢音とが一致しない場合  
この場合、仮名音注が、反切・同音字注と流通漢音とのどちらに一致するかが、本稿の課題にかかわる。

A. 反切・同音字注に一致する仮名音注

本資料には、流通漢音に合わない、次のような仮名音注が存する。(ラウト点を平仮名で示し、用例の送り仮名には濁点を付す)

- ア. 反切・同音字注の音が「廣韻」に記載されている場合
- ① 蒙<sup>ツ</sup> <莫公反> (一五七)
- ② 備<sup>ツ</sup> <彼力反> (セ) (六四〇)

①「蒙」は、長承本以下「蒙求」諸本・図書寮本および成實堂文庫本『文鏡秘府論』に「モウ」とある。

②は、「迫る」の意で屋韻である。ただし、日本漢音資料では、「ヒツ」とされるのが一般的である。

イ. 反切・同音字注の音が「廣韻」に記載されていない場合

- ③ 荐<sup>ツ</sup> (平) 是聚也 (五五五) ・荐<sup>ツ</sup> (去) (六四七)
- ④ 御<sup>ツ</sup> <音牙嫁反鄭魚掬反> (三四五上欄)
- 御<sup>ツ</sup> (去) 是迎<sup>ツ</sup> (去) 也 (三三六)
- ⑤ 趁<sup>ツ</sup> (入) <音促> 一數<sup>ツ</sup> <音速> ニシテ (七三六)
- ⑥ 趁<sup>ツ</sup> (入) <音促> 一數<sup>ツ</sup> <音速> ニシテ (七三六)
- ⑦ 癡<sup>ツ</sup> 隊<sup>ツ</sup> (去) <直類反> (五二四)
- ⑧ 詔<sup>ツ</sup> (支) 又反又作怡他刀反 (六三六) 詔<sup>ツ</sup> (去) 是疑<sup>ツ</sup> (平) 也 (六三六)

これを「キツ」とするのも「為筆反」の影響であらう。

右の十例は、流通漢音と異なり、同時に付された反切・同音字注から導かれる音に一致する。すなわち、この反切・同音字注から作り出された音であると考えられる。

B. 流通漢音に一致する仮名音注

一方、反切・同音字注に依拠せずに、流通漢音を加えた可能性の存するものが二例ある。

- a 樂<sup>ツ</sup> (平) <律悲反> 樂 (八七八) b 松<sup>ツ</sup> (平) <音忠反> 高は (三三三)
- a は、反切下字「悲」(脂韻開口字)に従えば、「リ」となる。ただし、唇音字は、開合に関して neutral であったと言われるため、この『經典釈文』反切からルイを導いたものかも知れない。
- b 「松」を反切に従って読めば、シウとなる。しかし、同小韻字「嵩」も、本資料では、「嵩<sup>ツ</sup> (平) 懸」(八八七)とある。「嵩」は、『蒙求』諸本で「シウ・スウ・シユ・ス」と表記が揺れ、興福寺本『大慈恩寺三藏法師伝』でも「シウ・スウ」の表記が共に見られる。

よって、これは、表記法の問題のようである。したがって、右二例は、反切を無視したとは断定できない。

四 金沢文庫本『群書治要』経部の反切・同音字注と声点

1. 反切・同音字注と、声点が示す声調

筆者は、かつて、本資料の声点全体を整理したことがある。<sup>注22</sup> その結果、本資料は、日本漢音で中心的な、六声体系であること、

全濁上声字への声点加点は、上声点と去声点とが同数程度であることが知られた。全体としては、右のとおりであるが、本資料には、次のような例が見られる。

- i 「廣」(加孟反劉皆行反) (二四三上欄) 廣(去) (二四二)
- ii 亨(去) (去濁) 入甚反 (一三〇)
- iii 蕩(上) (唐黨反) (三四三) 蕩(去) (二四四・七八・九〇)
- i 「廣」は、『廣韻』平声字である。しかし、第一反切下字「孟」は、去声字であり、第二反切「行」も去声を持つ。
- ii 「亨」は、『廣韻』上声字である。しかし、反切下字「甚」は、上声・去声両声字である。

iii 「蕩」は、『廣韻』で上声・去声両声字である。本資料では、反切を付す例のみに、上声点が加えられ、他は去声点である。反切下字「黨」は、『廣韻』では上声所属字である。これらの例においては、反切・同音字注が声点加点到に影響を与えたと考えられる。

そこで、反切・同音字注を有する例に限って、中古音の声調清濁と対照させた。すると、中古音全濁上声字の全四例に上声点が加えられていた。次の例である。

- 蕩(上) (唐黨反) (三四三) 蟻(上) (市忍反) (五〇二)
  - 簿(上) (步古反) (七〇五) 解(上) (音響) (二〇三)
- これらは、注された反切下字・同音字の中古音声調がいずれも上声である。それに依って、上声点が加えられたものと解釈される。

- 惛(平濁) (女姬反) (二四三) 耗(去濁) (莫報反) (八三九)
- 樂(入聲) (音岳) (十卅)

この例の本文は、『淫楽沈面』である。声点では、「インラク」の音を加えたものであろう。よって、同音字注と声点とが別音を示した例であり、他の濁声点加點例とは異なる。<sup>注24</sup>次に、反切・同音字注が無い場合を見る。

この場合も、本資料は、同期の他資料と比べて、濁声点をよく加点している。しかし、次の通り、単点の例が見られる。疑母・日母字から、若干例を挙げる。

- 疑(平) (七九)
- 疑(去) (八六一) 偽(去) (三二七) 敖(平) (八三三)
- 疑(平) (二〇六) 瓦(去) (六四三・八三九) 儀(平) (八七六)

さらに、先の反切・同音字注を持つ濁声点加點例と同一字であっても、次の如く、単点の場合がある。

- 仍(平) (六七一) 仍(平) (三三六) 仍(上) (二三五)
  - 綏(平) (七三六) 芮(去) (九六七) 柔(平) (一三六)
  - 樂(入聲) (七二六) 敖(平) (八三三)
- 右のとおり、反切・同音字注の有無によって、濁音標示に差が生ずる。

る。

反切・同音字注を有する例にも、当該字の声点が中古音声調と異なるものが存する。それには、右の i・ii などの例が含まれ、当該字の『廣韻』声調に合わないものの、反切下字の声調と一致する例が大部分である。<sup>注25</sup>

よって、反切・同音字注の声調が本資料の声点による声調標示に反映されたと考えられる。

### 2. 反切・同音字注と濁音表示

ここでは、反切・同音字注が存する場合と存しない場合とを、はじめから分けて見ることにする。

日本漢音で、濁音が原則である次濁声母字(ただし、来・于・喻母および明・微母の一部を除く)の声点を見る。

すると、反切・同音字注が有る場合、一例を除き、すべて濁声点となっている。

- 樂(入聲濁) (音岳) (五三〇・十〇二) 敖(平濁) (五羊反) (二四〇)
- 契(平濁) (五羊反) (五二二) 刺(去濁) (魚器反) (二三六)
- 取(去濁) (音御) (八七三) 躡(上濁) (俱禹反) (三三九)
- 覓(平濁) (音迷一五分反) (五一六) 愿(去濁) (音願) (二〇一)
- 狂(去濁) (音岸五分反) (十二十三) 藥(入濁) (魚列反) (二二七)
- 我(平濁) (五河反) (三三三) 俄(平濁) (五何反) (三三二)
- 則(去濁) (如志反) (二三六) 飪(去濁) (入甚反) (二〇三)
- 臺(上濁) (亡偉反) (二四七) 忸(入聲濁) (女六反) (二四三)

### 五 結論

本稿の目的は、鎌倉時代中期加點の金沢文庫本『群書治要』経部に「人為的漢音」が存するか否かを調査することであった。検討の結果、金沢文庫本『群書治要』経部において、以下の点<sup>注26</sup>が知られた。

1. 日本漢音として一般的ではない「人為的漢音」が存する。
2. 声点による声調標示も、反切・同音字注を反映した部分がある。
3. 声点による濁音標示も、反切・同音字注を反映している。

### 六 今後の課題

右にまとめた本資料の反切・同音字注の利用法が、日本漢字音史上にどのように位置づくのかは、今後の課題である。

このころみに、書陵部蔵『春秋経傳集解』文永加點本において、金沢文庫本『群書治要』で「人為的漢音」として指摘した例について調査した。その結果、仮名音注が付されていたのは、先に金沢文庫本『群書治要』の⑧として挙げ例した次の箇所のみであった。

諂(平) (本又作怡他刀反) は疑(平濁) 也 (二五〇)

金沢文庫本『群書治要』に存した「支又反」の反切は無く、「他刀反」に依って、「タウ」の仮名を付している。「怡」にも「他刀反」の反切を付し、「諂」(二〇四割注)とする例がある。先に見たとおり、「諂」の流通漢音は、「テン」である。よって、この「タウ」

も、「人為的漢音」となる。

なお、金沢文庫本『群書治要』の当該本文箇所とは異なるが、先に「人為的漢音」として掲げたもの同一の例を、この書陵部蔵『春秋経傳集解』中に指摘できる。

蒙(平濁) (三二九) 偏(彼力反)(八三六・二四〇)

偏(二五七) 偏(徐甫目反又彼力反)(同、上欄)

癡(隊) (直類反)(二二二)

さらに、新たな「人為的漢音」の例を加えることもできる(紙幅の許す範囲で掲げる)。

鄆(平輕) (芳忠反)(八四八) (宋韻敷空反)(同、上欄)

右例では、本行は、「人為的漢音」ヒウとする。しかし、流通漢音との差が大きいためか、『宋韻』(大宋重修廣韻)の反切を上欄に引用している。

畜(入輕) (許六反注同一六勅六反)(二八四)

右例では、流通漢音の「チク」ではなく、第一反切から出る「キク」を採用している。

柎(上) (歩口反又六附)(二五〇)

右例は、反切によった「ホウ」に合点が付されている。

羊(上濁) (彌爾反楚姓也)(六〇〇) 羊(上) (彌爾反)(二二二)

右例も、『經典釈文』の反切によって、『廣韻』に無い「ビ」の音が加点されている。

また、流通漢音とは異なる「スイ・ツキ・ルキ」の表記が見られる。

さらに、「スイ」等も存する。<sup>注27</sup>

離(二〇一七) 榎(二〇一〇割注) 菓(平) (二六六割注)

對(去) (直類反)(二八四) 對(同二一割注)

この資料は、反切が付されることが希である。しかし、反切を引用する場合には、それが機能していたと考えられる。<sup>注28</sup>

一方、金沢文庫本『群書治要』と同時代の経書訓点資料に、反切を参照しながらも、人為的漢音が無いものとして高山寺蔵『論語』が指摘されている。<sup>注29</sup> 同時代の経書加本になぜこのような相違が生じるのかは、未詳である。<sup>注30</sup>

個々の文献の整理を続けるとともに、このような加点がなされる理由を考えていく必要がある。<sup>注31</sup>

注1 高松政雄「中古「正音」(『国語国文』第四十四卷第六号、一九七五年六月)、沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(一九九七年、汲古書院 六一頁、等参照)。

注2 この実態を体系的に示したものとして、沼本前注著書が挙げられる。

注3 中国においても同様であった。今日でも漢詩の押韻は、切韻系韻書のそれを基本とし、漢和辞典に記される反切も中古音を示す韻書から採られている。小川環樹『唐詩の押韻——韻書の拘束力——』(『中国語学研究』(一九七七年、創文社)、参照)。

注4 沼本注1著書、第一部第三章、参照。なお、『孔雀経音義』について、他に、沼本克明『日本漢字音の歴史』(一九八六年、東京堂出版) 二一八頁・石塚晴通『唐招提寺蔵孔雀経音義』(北大国

綏(荀佳反)(二四三) 蕤(人誰反)(二四四)

炊(平) (昌垂反)(二五三) 離(音佳)(三〇五五)

離(音佳)(二一三) 離(音佳)(二一三)

離(平) (音離)(一三三) 離(一五三割注)

離(直類反)(二二七) 隊(去) (同、割注)

離(丈偽反)(七四三) 離(同、割注)

離(力軌反)(二二七割注) 離(力軌反)(三〇五)

右の止攝合口字の仮名遣いとしては、「スイ・ツキ・ルイ」が古来一般的であったことは、はやくに説かれ、<sup>注25</sup> 現在では漢和辞典の記述も改められてきている。しかし、現に、右のような例を指摘できる。右の諸例には、反切・同音字注が付されている。おそろく、これらの反切・同音字注によって作り出されたものであろう。<sup>注26</sup>

このような加点を有する書陵部蔵『春秋経傳集解』は、先に確認したように、院政期の清原頼業点を正確に移点していた。

現存する院政期の『春秋経傳集解』には、仮名音注が少なく、「人為的漢音」は指摘できない。しかし、書陵部蔵『春秋経傳集解』の仮名音注も清原家累代の訓説に基づいて加点されたものであったならば、前代にも、「人為的漢音」が存したことになる。

つぎに、加点年代が降る清原家加本を見てみる。

静嘉堂文庫蔵『毛詩』清原宣賢点にも、これまで指摘してきたような例を見出すことができる。

御(牙嫁同)(二四二) 御(去) (去) (同二四割注)

幅(偏)(入) (二五三)

語学講座二十周年記念論輯 辞書・音義 (一九八八年、汲古書院)所収・佐々木勇『唐招提寺蔵『孔雀経音義』の反切について』

〔訓点語と訓点資料〕第一〇六輯、二〇〇一年三月、参照。

注5 沼本克明『日本漢字音の歴史』二二七頁。

注6 一「一」の反切下字「久」に呉音「ク」を加点したのは、このずれを修正するためであると考えられる。<sup>注5</sup> 文献、参照。

注7 現代の漢和辞典に反切と日本漢字音とを掲げる場合も、このずれが存する。たとえば、漢釋法によって作られた音形が多いと批判のある諸橋暉次『大漢和辞典』凡例にも、「反切は集韻・廣韻を中心とし、更に廣く各種の韻書・字書を渉猟してこれを掲げた。」「漢音・呉音は反切に本づき、実際の用例を参酌して決定し、(以下略)とある。そして、「不」に「集韻」反切「方鳩切」を掲げながら、「ヒウ」ではなく、漢音「フウ」としている。

注8 左注、沼本論文、参照。流通漢音と反切から導かれる音と異なる場合に、「人為的漢音」と呼ばれている。両者が一致する多くの場合についても、反切を参照してはいたはずである。しかし、両者が一致する場合は、本稿でも「人為的漢音」と呼ばないこととする。このように定義したときの「人為的漢音」が経書にも存することを指摘し、その意味を考えるのが、本稿の目的だからである。

注9 それぞれ、以下の論考による。沼本克明『漢籍訓点資料記載の字音——漢書訓点資料の場合——』(『国語国文』第三十八卷第八号、一九六九年八月。後、『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』(一九八二年、武蔵野書院)第二章)および沖森卓也『延久鈔史記の訓読について——助字を中心とした訓法と字音——』(『白百合女子大学研究紀要』第十五号、一九七九年十二月)。

注10 それぞれ、次の論文参照。佐々木勇「醍醐寺蔵『妙法蓮華経釈文』の声点加点について——前後半の相違と表紙見返中段記事の解釈——」『訓点語と訓点資料』第一〇三輯（一九九九年九月）、沼本克明『説語漢音に於ける学習音の介入——蒙求字音点の場合——』（『鎌倉時代語研究』第十輯、所収。後、注1著書に収載）。また、図書館本『類聚名義抄』・高山寺蔵『理趣経』一六四七年点の四声が韻書と完全に一致することから、日本漢音の声調は、韻書の支えで維持されたのではないかとわかれていた（沼本注1著書、一五四頁）。

注11 現代の漢和辞典も、切韻系韻書の反切を引くのが一般的である。そして、その反切から導き出されて、日本漢字音と異なる音に記載されていることは、しばしば指摘されることである。  
注12 小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的的研究』（一九六七年、東京大学出版会）一二六六—一二七〇頁。同「金沢文庫本群書治要の訓点」（『古典研究会叢書 漢籍之部』15 群書治要七）（一九九一年、汲古書院）所収「解題」、参照。小林論文で、頼業点と書院部蔵本は、ほとんど一致するが、群書治要本では、頼業点と異なる訓点を施していることが明らかにされた。群書治要本は、反切を省略している、本文の校異において頼業点が「摺本」とした方を採用している、など、頼業点の古訓法を改めたところがあることが指摘された。

注13 足利衍述『鎌倉室町時代の儒教』（一九九二年、日本古典全集刊行会）八四四頁。  
注14 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就ての研究』六三七頁。  
注15 『経典釈文』は、通志堂本（『新校索引 経典釈文』へ中華民国七

十七年、学海出版社）に依る。

注16 ただし、掲載例では、責（彼為反）は、『経典釈文』で（彼偽反）とあり、不一致である。本資料が、通志堂本と別系統の本文に依拠したためであろう。また、金沢文庫本『群書治要』には、『龜入玉篇曰受也苦含反』（八四上欄）の例があり、これが通志堂本『経典釈文』に見えない。

また、本資料において、『経典釈文』のどのような性格の音注が残されたのかは、今後の課題である。たとえば、『周易』では、原則として、卦の最初の反切・同音字注ばかりを採っている。現存する院政期経書訓点資料の反切数から見ても、教隆が移点底本とした『周易』にも、さらに多くの反切・同音字注が加点されていたと考えられる。

なお、『経典釈文』に音義が存しない「孔子家語」などの注をどこから引用したものかは不明である。

注17 坂井健一『魏晉南北朝字音研究』（一九七五年、汲古書院）参照。  
注18 具体例は、小林芳規・原卓志・山本秀人・山本真吾・佐々木勇編『宮内庁書院部蔵本 群書治要経部語彙索引』（一九九六年、汲古書院）の「字音索引」を参照願いたい。ただし、「鹿牡（去濁）」（五五）では、侯韻明母字「牡」が模韻化しない。この語は、現代の漢和辞典でも、「ユウボウ」と読まれている。「牡丹」を「ボウタン」とも読む（三巻本『色葉字類抄』）類の特殊な語音のようである。また、流通漢音と異なるものとして、「蒙」と同小韻字の「蒙」に、「ホウ（平濁）」（二二割注）の加点例があり、「穢（去）」徳（六三）がある。

なお、次のように、異音を加点した例もある。  
濁（音普）「天之下（三三）」

汗（音鳥）（五四） 「汗（平）穢（去）」（十）  
右の「薄」は、アマネシの意で、流通漢音はホである。該当箇所を残す「毛詩」の古写本として、清原宣賢加点本が複数存在する。その京都大学図書館蔵享祿五年（一五三二）点・静嘉堂文庫蔵同年点では、いずれも同音字注を引かず、「ホ」の仮名音注がある。「汗」も、書院部蔵『春秋経傳集解』では、汗（音鳥）（二〇）にある。

注19 高山寺本『論語』にも、同様の例が指摘されている（沼本克明『中原本論語卷四・八に引用された論語釈文の性格と論語訓読に於ける影響に就いて』（『高山寺資料叢書 第九冊』（一九八〇年、東京大学出版会）所収。後、注1著書に収載）。経書の訓読に、韻書・辞書ではなく、『経典釈文』所収の各書音義が用いられた理由もここにある。すなわち、当該箇所における音・義をすみやかに確認することが目的であったと考えられる。

注20 十例は、僅かな数である。しかし、本資料に、反切・同音字注とともに仮名音注が加点された例は、二二六例ではない。また、その他、次のような例がある。

札（側八反徐音載杜注左伝夫死曰）（八三二上欄） 大札（八三二）  
大札（八八）

卷八八行目の「札」には、『廣韻』に記載のない音セツが付されている。これは、32行目の徐注に見られる「音載」に依るものかも知れない。

齒音魚韻字の内、いわゆる乙類（三等B類）の牡母・牀母等に配される諸字は、日本漢音ではソ・シヨで揺れる。本資料においても、「阻（上）」（六三）「折組（去）」（八三）では、ソである。しか

し、反切が付されると「阻（上）（莊呂反）を」（一四）「鉏（平）鬻（去）（任但）（俱）反」（五五）となる。反切下字「呂、但」の影響によって、シヨの仮名音注が選ばれたものかも知れない。

注21 河野六郎『朝鮮漢字音の研究』四二五頁。  
注22 佐々木勇『日本漢音の軽声減少について——漢音の国語化の側面から』（『国語国文』第六十四巻第十号、一九九五年十月）。

注23 ただし、「ヒ（上）（必以反）」鬻（去）（勅亮反）（二二）の「鬻」は、当該字・反切下字ともに去声で、合わない。「鬻」は、本資料（三三）では、去声点加点されている。  
注24 これは、卷十「孔子家語」の例であり、『経典釈文』に音義が無い。「菜」に「音岳」の音注が付されることは、『経典釈文』中に比較的多く、ここでは文脈上不適當であるにもかかわらず、その音が引用されたものと考えられる。

注25 満田新造「スキ」「ツキ」「ユキ」「ルキ」の字音仮名遣いは正しからず」（『國學院雑誌』第二十六巻第七号、一九二〇年七月。後、『中国音韻史論考』一八九四年、武蔵野書院）に所収。  
注26 スイ・ツイ・ルイも併存する。しかし、たとえば「退」を「タキ」などとすることはないため、単なる仮名遣いの揺れではないと考えられる。なお、たとえばスイとスピとに、音声として差が存したのかどうかは不明である。

注27 築島裕『静嘉堂文庫蔵毛詩鄭箋古点解説』（『毛詩鄭箋』三）（一九九四年、汲古書院）所収）にすでに指摘がある。本稿では、それ以外の例を少数掲げた。

注28 反切を引用しない場合にも、このような加点の背景には、反切による学習が存したのと思われる。なお、他資料の例を加える。神宮文庫蔵『古文尚書』正和二年

(二二三) 清原長隆加本(小林芳規先生からお借りした写真版による)には、「藥(五達反)」「(五18)」と『經典釈文』音注を引き、割注に「カツ」の仮名音注を付す。「藥」の流通漢音は、「ゲツ」である。これは、国会図書館蔵清原宣賢加本『古文尚書』でも同様である。

藥(カ入濁) (五18) 藥(五達反) (同、上欄)

注29 沼本注19論文。

注30 高山寺本『論語』は、残存巻が少なく、反切・同音字注と仮名音注とがともに加点了された例が少ないためかも知れない。しかし、声調については、高山寺本『論語』が流通漢音声調を重視するのに対し、金沢文庫本『群書治要』は反切音に従っており、異なる。高山寺本『論語』は、清原本・中原本ともに、表記の規範が緩く、音声を比較的良く反映しているようである。その具体例は、『高山寺資料叢書 第九冊』の「補註」に指摘されている。高山寺本『論語』には、「二音節語の長音化」と言われる希・費などの例、唇内入声のウ表記例と他の韻尾のフ表記例、等が存する。金沢文庫本『群書治要』には、これらの例が無い。

注31 漢籍訓点資料においては、鎌倉時代には反切よりも仮名音注が優勢になり、室町時代には反切の記入が希になることから、反切引用は次第に形式的になったと説かれている(沼本注14著書、七一頁)。しかし、本稿で見た如く、鎌倉中期でも反切・同音字注が機能していた資料は存する。

本稿において、広韻記載音とそれ以外に分けたのは、便宜的でしかない。中国中古音反切を引用することは広く行なわれている。よって、その反切にもとづく「人為的漢音」は、反切を引用するなどの文献においても、存在する可能性がある。「人為的漢音」

を排する文献と、それを認める文献とがあり、それは加点了者の位相・文献の性格を反映していると考えられる。

小松英雄は「Sino-Japanese Systems in Use」(ACTA ASIATICA) 65, 1993: 8. 後「日本語の語体系——読誦音整備の目的を中心に——」として、築島裕編『日本漢字音史論輯』(一九九五年、汲古書院)に、日本語に書き直されて所収)において、複数の日本語音が存在し続けたのは、「それぞれの宗派のアイデンティティーを確認する意味をもっていた」ためであるとした。この線で考えれば、『經典釈文』反切を引用し、その音を示すことは、博士家のアイデンティティーを守るためということになる。

資料調査を重ねた上で、さらに考えたい。

〔付記〕 本稿を成すにあたり、東洋文庫・宮内庁書陵部の皆様には、資料閲覧につき、お世話になりました(調査には、平成十三年度科学研究費(湯沢質幸代表基盤研究B「日本漢字音データベース(大字音表)作成のための基礎的研究」)を使わせて頂きました。また、本稿は、平成十三年度 広島大学国語国文学会秋季研究集会(二〇〇一年十一月二十五日)における研究発表をもとにしています。席上・集会后、多くの先生方にご指導頂きました。さらに、投稿後、査読委員各位から参考意見を頂戴し、加筆修正することができました。記してお礼申し上げます。

—— 広島大学助教授 ——

(二〇〇二年二月六日 受理)